

## イスラム国へ追い込む絶望 濱野智史

朝日新聞 2014年10月30日

(文中の青太字は引用者による)

過激派組織「イスラム国」(IS)の存在感が増している。正直なところ筆者は、これまでイスラム圏で起きてきた数々の大きな出来事を、どこか「身近な問題」だとは感じられずにいた。日本は石油資源の面でも大きくこの地域に依存しており、中東の問題は決してこの国にとって無関係ではないとよく言われるが、それでもどこか私は、「日本から遠く離れた世界のこと」だと思っていたのである。そのため、イスラム国のことも当初はあまり関心がなかった。

しかしそれが大きく変わったのが、今月初め、北海道大学の男子学生がシリアのイスラム国への渡航計画を立てたことで、「私戦予備および陰謀」の容疑で事情聴取されたとの報道を聞いてからである。

報道によると、この学生は就職活動に失敗していたようだ。イスラム国への渡航を目指した動機として、「別のフィクションに身を投じたい」といった趣旨の発言をしたとも報じられている。この発言に対しては、「フィクションだと？ かの地では多くの血が流れているのに」「認識が甘すぎる」といった批判がネットでは相次いだ。

しかし筆者が注目したいのは“別の”という表現である。日本での就職活動は、確かに「フィクション」に満ちている。就職戦線を勝ち抜くために、学生たちはありもしない志望動機を創作し、「御社にふさわしい人材」になるための演技を強いられる。これはまさに“虚構”そのものではないか。

この学生の相談に乗ったというイスラム法学者の中田考氏は、雑誌「Wedge」編集部によるインタビューに、イスラム国へ向かう日本人は増えるはずだとし、次のように答えている。「日本にいて何かいいことがあるだろうか。毎年3万人も死んでいくような国。自殺するよりまし。『イスラム国』へ行けば、本当に貧しいが食べてはいける」と(同誌ウェブサイト)。

鋭利な言葉だ。いくら職にありつけないといっても、そうそう食べるには困らないはずの「豊かな」先進国・日本の大学生が、わずか月給50ドルの「貧しい」イスラム国を目指すという選択のリアルが、ここには凝縮されている。たとえわずかな賃金でも、イスラム国で「聖戦」という「大義」のために戦うほうが、「ブラック企業」で「やりがい搾取」されるよりもマシだという叫びが聞こえてきそうではないか。

ちなみに渡航を決意した大学生は、ネット上では「非モテ(異性にモテないこと)」を自称していたという。仕事もなければ、恋愛相手もない。そんな承認欲求を得る場を失った先進国の若者にとって、今やイスラム国は、絶好の逃避先としての「ここではない、どこか」に見えたとしても不思議ではない。

実際、イスラム国の特徴は、ネットを活用した巧妙なメディア戦略にあると言われる。まず、極めて残虐なジャーナリストの処刑動画は、欧米圏の記者を当該地域に寄せ付けない「排除」の役割を果たす。「閉域」を作るのはカルトの基本だが、イスラム国の実態を外から知ることができなくなれば、まさに格好の「ここではない、どこか」感も演出できる。と同時に、残虐な動画は欧米諸国を挑発する「宣伝」にもなる。グローバル資本主義の親玉・米国にケンカを売ること以上に、効果的に全世界にアピールする手段は他にないだろう。

ゆえにイスラム国は危険である。まだ渡航者も増えるだろう。かといって、ただ**イスラム国を「攻撃」しても、根本的な問題は解決しない。イスラム国を潰しても、第二第三の勢力が出てくるだけだ。むしろ私たちが向き合うべきは「内なるイスラム国」であろう。つまり、イスラム国のような「ここではない、どこか」に一抹の希望を見てしまう若者を、いかにして「いま・ここ」の日本社会が受け入れることができるのか。すべてはそこにかかっている。**